

講座

こころの友伝道入門シリーズ⑤



個人伝道と 「こころの友伝道」の関係



日本基督教団
西川口教会

牧師 **金田佐久子**

「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」（使徒4:12）

私たちを救ってくださる唯一の方、生けるキリストを紹介する伝道の業に、全てのキリスト者が召されています。私たちは、キリストの救いにあずかった感謝と喜びの中に、自分の身近な家族や友も生きてほしいと願っています。恐らく、こころの友伝道紙の読者の方々は既に、個人的に伝道を始めておられると思います。例えば、教会の礼拝や企画されている集会に誘ったり、キリスト教の番組や映画などを紹介したり、聖書や信仰に関する読み物や、聖書の言葉やキリスト教にちなんだグッズをプレゼントしたり、愛のこもったお便りを送ったりなど、あらゆるチャンスを捕らえ始めておられることと思います。そこには、祈りがあり、忍耐が必要です。自主的な、個人的なものであるので、時には、自分中心の思いで動いたり、気持ちや

感情に左右されたりして伝道の働きかけが続かないことも起こり得ます。自分のしていることや気持ちを分かち合う場所がないかもしれません。

西川口教会のこころの友伝道（当時は「訪問伝道」）は1966年に始まりました。「アンデレ会」という名称で、長く活動が続けられています。これは「組織された」こころの友伝道です。私がアンデレ会の一員となりましたのは、30数年前、大学を卒業して就職した頃でした。定例会に参加し、こころの友伝道関東講習会に出席し、少しずつこころの友伝道奉仕について理解を深めていきました。毎月の定例会で、求道者や担当者の報告をし合い、状況を知り、お互いの担当者のため、お互いのために祈り合うことは、まことに心強く、大切であることを体験しました。こうして、奉仕者自身が慰められ、励ましをいただき、整えられていきます。情報を共有しているので、一人で抱え込む必要もありませんし、互いに補い合うこともできます。このようにして、奉仕者が皆で忍耐して祈っていますから、担当者が受洗へと導かれた時は、喜びも大きくなります。

先日、うれしいことがありました。アンデレ会のT姉は、数年前から職場伝道を祈りの課題にし